

第5回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

<https://doi.org/10.15017/21650>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 5, 1981-01-20. 九州大学教養部
バージョン：
権利関係：

第5回合宿共同授業を主管して

河野 和正

長いようで終わってみれば短い4泊5日の合宿授業も、これで5回の歴史を経たことになる。参加大学は当初の6大学から12大学になり、また参加学生や参加教官も倍増をみたが、数の増加が必ずしも内容の質的向上を意味するわけではない。

今回からは、長崎大学からの提案もあって、「企画委員会」(仮称)が参加希望大学で構成された。趣旨は、単位認定を行うには、企画段階から、各大学の主体的参加を前提したいということと、授業の責任主体を確立し、あわせて授業内容の向上を計ろうというものであった。その席で、九州地区国立大学の教養部長会議(熊大、鹿大、長大、佐大、琉大、九大)を合宿共同授業の責任主体の委員会にしたい旨の提案があった。来年度からは、教養部長会議(11月開催予定)を経てこの線で開催されることになろう。しかし、それでもなお、国立大学間の単位の相互認定の場合とは、若干、ニュアンスの違いがあり、単位認定は、各大学の自主的な判断にまつ以外はない。一方、授業内容の統一という問題と参加大学の増加とは、第1回合宿共同授業からの、参加大学それぞれからの講師派遣という原則と大きく矛盾することとなった。統一テーマに集中し、一貫性を求めれば、それだけ各大学からの講師派遣が困難になってくるからである。この問題については、各大学で行われている総合科目の場合とほぼ同様であり、従って統合の努力はするにしても、現状のままでも、それなりの十分な意義を認めて、割り切った方がよいと考えている。

この春、1つの夢をみた。合宿共同授業を大きな船をチャーターして海上で行い、中国訪問でしめくくったという夢である。丁度、福岡の私立柳川高校が、修学旅行に中国訪問を企画し、その旅程中の模様がテレビで放映された夜のことであった。琉大の諸君が往復2日船中で過すことを考えれば、中国はその一步先にすぎない距離であり、アジアの近い隣国との交流は、九州の大学間の交流以上に意味のあることに違いない。近い人々にその話をすると賛成する人が少なくなかった。すこし大風呂敷ではあるが、それくらいの夢は、いつか実現できると思っている。

最後に、この企画に積極的に参加して下さった各大学の講師、2分校制を可能にして下さった熊本大学、さらに九重分校で積極的に連絡調整の労をとって下さった学生の委員諸君に厚くお礼を申し上げます。

(前九州大学教養部長、第5回合宿共同授業九重分校長)

第5回合宿共同授業・朝日分校を主催して

奥村孝一

本年で第5回を迎えた合宿共同授業に、西岡前教養部長の後をうけて、朝日分校の主催者として責任の一端をになうこととなったが、オーガナイザーをはじめ関係者各位の大変な努力と協力によって、成功裡に無事終了したことにまず感謝したい。

雨に降られ通しの5日間で、最終日まで太陽が見られなかったのは、梅雨時とはいえささか残念であった。しかし、久住登山予定の第3日に、降ったり止んだりの中をすがもり小屋まで登って、帰途には山中で弁当を開くことができたのは、幸いというべきであろう。

本年の共同授業のメインテーマは、1980年代の幕開けにふさわしく、現代及び将来の社会を考えてゆくための出発点ともなる「現代社会の諸問題」についてであった。私も老学徒として、学生諸君と一緒に聴講させていただいた。平常私の講義している物理学とは全く異なる分野の知見で、興味深く拝聴したが、その中のある講義は、講師の静かで強い情熱が伝わって、今なお心に残っている。各大学の教官が、平常とは異なる枠組の中で取り組まれた授業には格別の強さがあり、学生に強い印象を与えたものと思う。しかしながら、かなり過密な授業日程ではなかったかというのが、ほとんど全ての講義に出席して得た実感である。また、講義内容についての理解を深め或は確めるために、内容を少し割愛してでも、質疑などのための一定の時間枠を各授業時間の最後に設けることにしてはどうか。

受験競争のせいもあって、今まで余裕のある友人づきあいの機会が少なかったであろう現代の学生諸君にとって、5日間の合宿の間に、恵まれた九重の大自然の中で温かい人間関係を体験できたことは、各自の将来に少なからぬ影響を残すものと思われる。ただ、参加できる学生の数と、それに払われる労力の大きさを考え合わせると、多少の感慨もないではないが、この貴重な体験学習の機会に恵まれた学生諸君が、それぞれの大学における、さらには参加大学間での交流の輪を広げる核となってくれるならば、労苦もまた報われてあまりあるであろう。学生諸君の発展を切に期待したい。

終りに、共同授業の準備に当られ、かつ直接参加された主管校の九州大学をはじめ各大学の教官と事務官の方々のご労苦に対し、心より感謝を申しあげたい。また、昨年に引き続いて、朝日高原福祉センターを快く貸与してくださった朝日新聞西部厚生文化事業団のご理解とご好意に対して、厚くお礼を申しあげる。

(熊本大学教養部長・第5回合宿共同授業朝日分校長)

1. 第5回九州地区国立大学間合宿共同授業 実施要項

1. 目的 九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食をともにしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。
2. メインテーマ 「現代社会の諸問題」
3. 主管 九州大学教養部
4. 会場 1. 九州地区国立大学九重共同研修所（九重分校、当番校：九州大学）大分県玖珠郡九重町筋湯
2. 朝日高原福祉センター（朝日分校、当番校：熊本大学）大分県玖珠郡九重町田野
5. 開催期日 昭和55年7月11日(金)～15日(火)の4泊5日間
6. 参加資格 九州地区国立大学に在籍する学生（教養部をもつ大学においては教養部学生）で当該大学が指定する者。
7. 募集人員
- | | 九重分校 | 朝日分校 | 計 |
|----------|----------------|----------------|----------------|
| 福岡教育大学 | 9 ^人 | 0 ^人 | 9 ^人 |
| 九州大学 | 18 | 17 | 35 |
| 九州芸術工科大学 | 0 | 6 | 6 |
| 九州工業大学 | 6 | 0 | 6 |
| 佐賀大学 | 10 | 10 | 20 |
| 長崎大学 | 8 | 8 | 16 |
| 熊本大学 | 10 | 14 | 24 |
| 大分大学 | 5 | 4 | 9 |
| 宮崎大学 | 4 | 5 | 9 |
| 宮崎医科大学 | 0 | 6 | 6 |
| 鹿児島大学 | 8 | 8 | 16 |
| 琉球大学 | 12 | 12 | 24 |
| 計 | 90 | 90 | 180 |
8. 日程 別紙日程表のとおり

9. 講師と講義題目

九重分校

- | | | |
|--------------------------------------|----------|------|
| (1) 「英国と米国の文化」 | 九州大学教授 | 野口健司 |
| (2) 「80年代初頭の政治動向」 | 九州大学教授 | 徳本正彦 |
| (3) 「戦後沖縄における法体系と犯罪現象」 | 琉球大学教授 | 垣花豊順 |
| (4) 「現代芸術の動向の一つとしての不条理劇」 | 熊本大学助教授 | 井上厚雄 |
| (5) 「近代芸術とテクノロジー」 | 長崎大学助教授 | 山下俊介 |
| (6) 「古典文学の受容」 | 福岡教育大学教授 | 笠 栄治 |
| (7) 「20世紀の数学」
—代数学幾何学を中心として— | 佐賀大学助教授 | 田中達治 |
| (8) 「戦後における日本人の社会意識」 | 九州大学教授 | 安藤延男 |
| (9) 「都市生活と水」 | 九州大学教授 | 安東 毅 |
| (10) 「地域開発と住民」
—志布志湾開発を中心として— | 鹿児島大学助教授 | 飯田泰雄 |
| (11) 「現代法からみた環境問題」
—環境権論について— | 宮崎大学助教授 | 中川義朗 |
| (12) 「エネルギー・資源問題」
—特に電気エネルギーについて— | 大分大学教授 | 富永 明 |

朝日分校

- | | | |
|---|------------------|-----------------|
| (1) 「教育・青年問題」
—青年のアイデンティティの形成について— | 佐賀大学助教授 | 高澤 淳夫 |
| (2) 「文学と社会」 | 宮崎大学講師 | 福海成宏 |
| (3) 「自然保護の諸問題」 | 熊本大学助教授 | 今江正知 |
| (4) 「大自然のマルチ・イメージを使う英語教育」 | 宮崎医科大学
外国語人教師 | ロバート・J・
アダムス |
| (5) 「権力分立制と現代的諸問題」 | 熊本大学助教授 | 森本哲夫 |
| (6) 「芸術と科学の融合（ガウディの建築論）」 | 九州芸術工科大学教授 | 松倉保夫 |
| (7) 「現代のドイツ文学」 | 熊本大学講師 | 杉谷恭一 |
| (8) 「豊後土工と出稼ぎ病」
—地方経済・社会・教育・健康の地域問題— | 大分大学助教授 | 船橋泰彦 |
| (9) 「豊かな社会の幻影」
—エネルギー危機と社会福祉— | 長崎大学助教授 | 森田三郎 |
| (10) 「九州・沖縄の水資源」
—特に地下水資源について— | 琉球大学教授 | 古川博恭 |
| (11) 「放射性廃棄物の海洋投棄」 | 鹿児島大学教授 | 杉浦吉雄 |
| (12) 「科学の効用」 | 九州大学教授 | 後藤賢一 |

10. 参加申し込み

- (1) 参加希望者は、当該大学の担当係へ参加費を添えて申し込むこと。ただし、既納の参加費は原則として払い戻しをしない。

(2) 当該大学は、分校毎の参加学生名簿及び教職員滞在計画書を6月20日までに、九州大学教養部教務掛あてに送付すること。

(3) 参加費は、大学毎に一括して7月11日（第1日目）に各分校において払い込むこと。

11. 参加費（食費及び雑費）

6,000円（7月11日夕食から7月15日昼食まで）

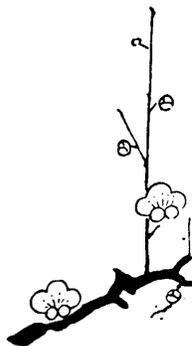
12. 単位の認定

当該大学の授業の一部と見なされるが、単位を認定するか否かは各大学の判断において行う。

ただし、認定することのできる単位数は2単位までとする。

13. その他

- (1) 持参品 筆記用具、ノート、洗面具、着替え類、パジャマ、登山靴又は底の厚い運動靴で履きなれたもの、雨具（ポンチョ又はビニールカッパ）、水筒、ジーパン（女子）、健康保険証、日常使いなれた薬など。
- (2) 集合 参加者は、各大学毎にまとめて7月11日（金）午後5時までそれぞれの分校に集合すること。
- (3) 解散 7月15日（火）午後1時現地で解散するが、参加者は各大学のバスで輸送する。



第5回九州地区国立大学間合宿共同

メインテーマ「現代社会の諸問題」

時 日	6	7	8	9	10	11	12	13	14
7月11日(金)									車中オリエン
7月12日(土)		起 床	朝 食	講 義 「80年代初頭 の政治動向」 九 大 徳 本 教 官	休 憩	講 義 「戦後沖縄に おける法体系 と犯罪現象」 琉球大 垣 花 教 官	昼 食	講 義 「現代芸術の 動向の一つと しての不条理 劇」 熊 大 井 上 教 官	
7月13日(日)	起 床 ・ 出 発	登 山				帰 着	昼 食	休 憩	
7月14日(月)		起 床	朝 食	講 義 「都市生活と 水」 九 大 安 東 教 官	休 憩	講 義 「地域開発と 住民」 鹿 大 飯 田 教 官	昼 食	講 義 「現代法から 見た環境問題」 宮 大 中 川 教 官	
7月15日(火)		起 床	朝 食	全 体 討 論	休 憩	全 体 討 論	昼 食 (反省茶話会)	解 散	

授業（九重分校）日程表

昭和55年度

15		16		17		18		19		20		21		22	
テーション				受 付	オリエンテーション	交 歓 夕 食 会				講 義 「英国と米国の文化」		自由時間	消灯就寝		
				自由時間						九 大 野 口 教 官					
				担当教官 打合せ会											
休 憩	講 義 「近代芸術とテクノロジー」		自由時間	夕 食	講 義 「古典文学の受容」		講義についての 自由討議(I)		消灯就寝						
	長 大 山 下 教 官		教合 官せ 打会		福教大 笠 教 官										
休 憩	講 義 「20世紀の数学」		自由時間	夕 食	講 義 「戦後における日本人の社会意識」		講義についての 自由討議(II)		消灯就寝						
	佐 大 田 中 教 官		教合 官せ 打会		九 大 安 藤 教 官										
休 憩	講 義 「エネルギー・資源問題」		自由時間	夕 食	自 由 討 議				自由時間	消灯就寝					
	大分大 富 永 教 官		教合 官せ 打会												

第5回九州地区国立大学間合宿共同

メインテーマ「現代社会の諸問題」

時 日	6	7	8	9	10	11	12	13	14
7 月 11 日 (金)									車中オリエン
7 月 12 日 (土)		起 床	朝 食	講 義 「文学と社会」 宮 大 福 海 教 官	休 憩	講 義 「自然保護の 諸問題」 熊 大 今 江 教 官 佐 藤 講 師	昼 食	講 義 「大自然のマ ルチイメー ジを使う英語 教育」 宮医大 アダムス教官	
7 月 13 日 (日)	起 床	朝 食	6:20 出 発	登 山				帰 着	休 憩
7 月 14 日 (月)		起 床	朝 食	講 義 「豊後土工と 出稼ぎ病」 大分大 松 橋 教 官	休 憩	講 義 「豊かな社会 の幻影」 長 大 森 田 教 官	昼 食	講 義 「九州沖縄の 水資源」 琉 大 古 川 教 官	
7 月 15 日 (火)		起 床	朝 食	講 義 「科学の効用」 九 大 後 藤 教 官	休 憩	閉 昼 全体討議 講 式 食			

授業（朝日分校）日程表

昭和 55 年度

15		16		17		18		19		20		21		22	
テーション				受付	開 講 式	交 歓 夕 食 会				講 義 「教育・青年 問題」		自 由 時 間	消 灯 就 寝		
				自由時間						佐 大 高 澤 教 官					
				担当教官 打合せ会											
休 憩	講 義 「権力分立制 と現代的諸問 題」		自由時間	夕 食	講 義 「芸術と科学 の融合（ガウ ディの建築論 ）」		講 義 「現代のドイツ文学」		熊 大 杉 谷 教 官	消 灯 就 寝					
	熊 大 森 本 教 官		担当教官 打合せ会		芸工大 松 倉 教 官										
自 由 討 議				自由時間	夕 食	自 由 討 議				自 由 時 間	消 灯 就 寝				
				担当教官 打合せ会											
休 憩	講 義 「放射性廃棄物 の海洋投棄」		自由時間	夕 食	自 由 討 議				自 由 時 間	消 灯 就 寝					
	鹿 大 杉 浦 教 官		担当教官 打合せ会												

2. 第5回合宿共同授業の講義要旨

(1)九重分校

① 英国と米国の文化

野口 健 司 (九州大学)

昭和46年から1年間、在外研究員として、米国および英国に出張した。英国に移ったとき一種の安堵感があった。同じアングロ・サクソン文化を母胎とし、同じ言語を国語としながらも、両者の文化には相当な質的相違がある。例えばラッセルは、ナショナリズムを比較して、本能的なイギリス人に対し、アメリカ人は知的であるといい、外国人を絶えず同化しようとするアメリカ文化の傾向を指摘している。私の経験した安堵感はこのことと無縁ではない。

これまでに体験した英国と米国の文化—その中心を成すのは文学作品を媒介としたものであるが—を基にして、両者の比較文化論的考察を試みる。歴史を誇るイギリス文化、広大な国土と多様な民族によって構成されるアメリカの文化が対象である。独断と偏見にみちた観方であることはお断りするまでもない。

② 80年代初頭の政治動向

徳本 正彦 (九州大学)

多元化し流動化しつつある国際政治の趨勢のなかで、昨年末以来、イラン・アフガニスタンの事件をきっかけとして、国際間の緊張がたかまりつつあるが、それは日本政治に対しても、これまでの動向の一定の局面にインパクトを与えてきている。この点をとらえつつ、ますます多難な内外政治の課題を前にして、80年代の日本政治はいまどのような針路をとろうとしているのか。そしてまた日本国民は何を望み、どのようにその意志を表明しつつあるのか。日本の議会政治はじまって以来はじめての、衆参両院議員の同時選挙の過程と結果をふりかえりつつ、80年代初頭の政治動向を考える素材を提供したい。テーマが大きいため、講義はどこまでも問題点の提示にとどまらざるをえないことをお断わりしておく。

③ 米国統治下の沖縄における法体系と犯罪現象

垣 花 豊 順 (琉球大学)

米国は1945年4月1日沖縄本島に上陸し、1972年5月15日沖縄が本土へ返還されるまでの約27年間沖縄を統治した。

対日平和条約(52.4.28)が発効するまでの沖縄における法体系は、(1)戦時国際法、(2)布告・布令、指令、(3)旧日本法、(4)立法院で制定された立法、(5)その他である。平和条約が締結された後の法体系は、(1)平時国際法、(2)対日平和条約、(3)大統領行政命令、(4)布告・布令・指令、(5)旧日本法、(6)立法院で制定された立法、(7)その他で、法体系は極めて複雑であった。

そのような複雑な法体系の下におかれた沖縄における犯罪現象についてみると、本土においては経済の復興した1950年(朝鮮戦争爆发)頃から各種犯罪が減少しているが、沖縄においては米軍基地建設が開始されたため、凶悪犯・粗暴犯が急増した。

④ 現代芸術の動向の一つとしての不条理劇

井 上 厚 雄 (熊本大学)

20世紀、とりわけその後半の芸術はギャングルの如何を問わず、いずれも10世紀に完成された近代リアリズム、科学的合理主義、ブルジョワ的社会観などの崩壊・破綻のあとをうけて、新しい価値観への模索、人間存在自体に関する問い直しの試みから成りたっている。サルトル、カミュの「実存主義の文学」を舞台の上で実現させたものとして、フランスを中心に活躍した劇作家ベケット(アイルランド人)、イヨネスコ(ルーマニア人)などの作品を総称して「不条理の演劇」と呼ぶ。

「不条理劇」の源泉とみられるものの短かい紹介から始め、代表的な作家各自の歩みとその主要作品の検討によって、演劇の提示する状況とそこに生きる人間存在の深層といったものを探求してみたい。具体的には、ベケット、イヨネスコ、時間が許すならば、ピンター、別役実などを取りあげるつもりである。

⑤ 近代芸術とテクノロジー

山下俊介（長崎大学）

現代はテクノロジー文明の時代であり、人類はその環境をのがれることはできない。テクノロジーとは、すなわちルネサンスにはじまる近代科学の成果の応用である。近代化学は観察対象は客体とし観察者を主体とする認識構図を基本とし、理想的にはこの主-客構図のなかで主体の関与が消去されることにあった。こうした認識構図を基本にもつテクノロジー支配下で人間が疎外されるのは必然である。芸術行為（鑑賞もふくむ）はときとして、このテクノロジー支配（疎外）からのがれる手段として語られ、また語られてきた。

この芸術観の典型はすでに19世紀後半の芸術至上主義にみられる。その破綻ののちに現代のいわゆるモダン・アート革命がはじまる。破綻の原因はなにか。近代芸術もやはり近代科学とおなじ認識構図のうえにきずかれたのではなかったか。たとえばレオナルド、彼は近代科学の創始者のひとりであり、また近代絵画の創始者であった。

⑥ 古典文学の受容

笠 栄 治（福岡教育大学）

文は書籍（書きとめられたもの）の意、献は賢人の意とし、その後代に伝承された「記されたもの」が文献である。文献にこめられた古人の心を考証するのが文献学で、広義の古典文学である。文献学は従って、記されたことば（文字・言語）の研究と、記されたもの（書物・書籍の類）についての研究という二面性を有する。

古典文学の受容は古人の心の受容（再生）であるが、文献の有力二面性から、まず記された文献資料の収集と資料評価の学と記された文（文学・言語・文章）の学として成立する。前者は通常書誌学と言われ、後者は言語学となるが、日本文学の研究では本文批評の学（訓話・注釈を含む）として成立している。

古典文学受容の柱の一つは書誌的思考によってなされなければならない。簡単に言えば、古典文学を承伝して来た書物について、その性格と歴史的役割について具体的に考察するものである。

⑦ 20世紀の数学

— 代数幾何学を中心として —

田 中 達 治 (佐賀大学)

代数幾何学は、 n 変数の多項式 $F_i(X_1, \dots, X_n)$ ($1 \leq i \leq m$) が与えられた時、連立方程式 $F_1(X_1, \dots, X_n) = \dots = F_m(X_1, \dots, X_n) = 0$ の解について研究する学問です。

1950年代末に、グロタンディックによりスキームの理論が発表されて以来、それは代数幾何学を研究する際に強力な武器となってきました。

ここでは、アフィン・スキームと呼ばれる一種のスキームについて、これが古典的な座標幾何を用いて表現される (代数) 曲線 $F(X, Y) = 0$ とどの様に関わりきっているのかを、非常に概説的に紹介します。この抽象化の過程で、「関数」がいかに重要な働きを為すかを見ることが出来ます。

現代では、与えられた集合の性質を調べる時に、しばしばその集合の上で定義された関数を問題にします。スキームの概念はこの思想の一つの典型的な例を与えていると思われれます。

⑧ 戦後における日本人の社会意識

— 主に「生き方」の問題を中心にして —

安 藤 延 男 (九州大学)

戦後における日本社会の変動はきわめて大きいものがあり、それに伴って生じた日本人の社会意識の変容もまた著しい。ここでは主として日本人の「生き方」の変化を、青年期のそれに焦点を合せてとり上げ、その原因などについても論及したいと思っている。文部省統計数理研究所による日本人の国民性調査や筆者らによる大学生の価値観の継時的、交差文化的研究などからすると、日本人の生き方は、この30余年の間に「社会中心主義」から「自己中心主義」へ、「禁欲主義」から「享楽主義」へと、大きな変化を示しており、この傾向は、ひとり青年だけでなく、年長の世代においても等しく観察される。しかしながら、日本人の深層文化には不変のものもある。

⑨ 都市生活と水

安 東 毅 (九州大学)

太平洋戦争後のわが国における産業構造や都市構造の変化とそれらに起因する都市住民の生活様式の変容は、いまやわが国における水の需給不均衡という新たな社会的問題となりつつある。特に、都市における産業資本や人口の高度集積と都市圏域の拡大は、都市用水—都市活動用水と家庭生活用水—の需要急増現象をもたらし、その結果として水資源の乱開発による自然の水循環系の破壊をひき起している。

この講義では、まず都市における水消費構造の変遷—水の都市における消費のあり方の変化—について述べ、次に今後私達が考えるべき方向として(1)都市における水多消費型生活様式への反省と、(2)上・下水道を総合した環境科学の視点に立つ新たな利水体系への提言を述べる。

⑩ 地域開発と住民

— 志布志湾開発を中心として —

飯 田 泰 雄 (鹿児島大学)

戦後日本の高度経済成長の過程は、他面から見ればその拡大された経済を容れるための地域開発の歴史でもあった。旧全総(1962)、新全総(1969年)、三全総(1977年)といった全国総合開発計画があいついで作られた。しかし1960年代末から、公害、都市問題等に象徴されるような開発のデメリット、産業優先、住民犠牲の開発のあり方が問い直されるようになってきた。そのような状況の中で、白砂青松、環境抜群の鹿児島県の志布志湾の海岸を埋め立てて石油化学コンビナートを建設するという新大隅開発計画案(1972年)が策定された。この計画は現在なお確定されておらず、県や国と住民の激しい争いが続いている。この計画をめぐる論議を整理しながら、今日における地域開発が住民にとっての意味を考えてゆきたい。

⑪ 現代法からみた環境問題

中 川 義 朗 (宮崎大学)

経済の高度成長がもたらした公害・環境破壊については、四大公害裁判をはじめとする損害賠償裁判によって、まがりなりにも被害者の救済がはかられた。また昭和40年代の公害対策基本法をはじめ

とする各種の環境法の制定によって、被害の救済にとどまらず水、大気、日光等人間の快適な生活に不可欠な環境の保護の制度や思想が一段と強まった。

しかし、経済・政治状況の変化やエネルギー問題もあって、これら裁判や法令の整備にもかかわらず、環境問題が好転したわけではない。「環境権」という新しい権利をもとに事業活動の停止をもとめる、いわゆる環境権裁判の続出がこのことを証明している。これは、これまでの事後的な賠償請求と異なって、環境保護のため事業の差止めをみとめる権利であるだけに、理論的課題も多いし、裁判所もその採用に消極的である。この理論をとおして多様な環境問題の一端を考えてゆく。

⑫ エネルギー、資源問題

— 特に電気エネルギーについて —

富 永 明 (大分大学)

エネルギーの形態には電気エネルギー、機械的エネルギー、化学的エネルギー、熱エネルギー等いろいろある。その中で電気が一番使い易い。そのため電気は産業だけでなく、人々の生活の隅々にまで入り込んでいる。こんな便利な電気にもアキレス腱がある。それは貯蔵できないことである。夏の風物詩高校野球も電力会社にとっては頭が痛い。クーラーの効いた部屋でテレビ観戦する、そんな時全国の発電所はフル稼働となり、人の寝静まった夜は半分以上の発電所が遊んでしまう。そのツケは結局電気料金の大幅値上げとしてハネ返って来る。果してこれで良いのだろうか。また冷暖房に電気を使う必要が一体あるのか。熱(石油)→電気→熱(冷)より熱(輻射)→熱(冷)の方がはるかに良いはずである。いま大分大学では太陽熱冷暖房の研究に真剣に取り組んでいる。



(2) 朝日分校

① 教育・青年問題

— 青年のアイデンティティの形成について —

高澤 淳夫 (佐賀大学)

人間の経験と意識とにおいて、現代社会は「抽象的な存在」になっている。現代人は「社会を生きる」のではなく、見知らぬ現象としてそれに直面する。この社会は意味と現実性に対する人びとの渴望を「模擬的」にしか満たさない。人びとは制度的現実から「心理的距離」をとり、私的な境界内で意味と現実性を感得しようとする。

こうしたフレームから、今日の青年の意識と行動とを各種の調査データ（当日配布）に即して分析する。とりわけ、彼らのアイデンティティ形成におよぼす社会構造的要因を重点的に論じたい。この作業を通して、青年の類型論を析出してみたい。提出する諸類型と受講者各自の「偏位」について考えて頂ければ幸いである。

② 文学と社会

福海 成宏 (宮崎大学)

今世紀初頭に生きたオーストリアの作家フランツ・カフカ（1883～1924）の生涯と彼の描いた世界を観ることで、現在の我々の社会でも、重要な、しかも解決困難な問題となっている「疎外」を考えてみたい。

この言葉に関連するのは、自己不在、人間不在、人間の道具、機械D、組織の歯車、近代的組織社会、官僚主義、テクノクラート社会、脱落者、アウトサイダー、無宿、根無し草、他所者、異邦人、故郷の喪失、家庭の崩壊などといった現象である。

③ 阿蘇の自然

今江 正知 (熊本大学)

阿蘇は九州の中央に位置し、その火山活動の影響は半径約 100 kmの範囲に及んでいる。

また、この地域の広大な部分が長年にわたる放牧・採草・火入れによって草原状態が維持されており、多くの特殊な動植物が分布することでも知られている。そのため、九州の動植物相を解明する上で、極めて重要な地域の一つである。

この動植物や自然現象を、阿蘇郡高森町津留に住んで“ふるさと”の記録づくりに努めておられる佐藤武之氏のスライド集「ふるさとの自然」を通じて紹介する。

④ 大自然のマルチ・イメージを使う英語教育

ロバート・J・アダムス（宮崎医科大学）

日本の現代社会のあらゆる問題の中に、日本人の国際観の貧しさがよくあげられている。それにはいろいろな原因があるが、日本人は外国語が苦手だから、外国や外国人を理解できないとよく言われる。日本人は、外国語に強くなったり国際観を豊かにするためには、今までの外国語の学び方と使い方を直さなければならないと思う。

その一つの方法に単語の学び方の工夫が上げられる。単語を習う時、最も適当な言葉—自分にとって一番楽しく、意味が深く、よく使われそして使い易い言葉—を選ぶのである。そのような言葉は、概して大自然とその現象を表わす言葉である。そこでまずその名前（たとえば地名等外国語で親しみのあるもの）を先に頭に入れる。そしてその言葉を中心に言葉をつなぐ。そうしてゆけば、どこへ行っても誰に会っても恐くない。言葉は自然に出て来るのだから。

私は、マルチ・イメージの設備を使いながら、大自然の写真を見せて、皆が親しみを持っている英語の単語の学び方をお話したいと思う。親しみ深い単語を習ううちに、いつの間にか英語の文法は覚えられるであろう。

⑤ 権力分立制と現代的諸問題

森 本 哲 夫（熊本大学）

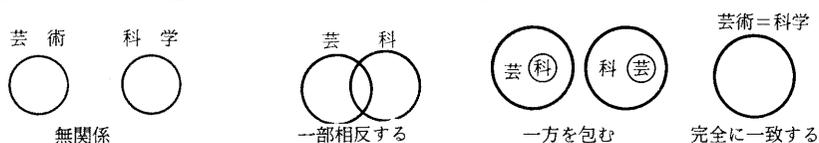
- (1) まず論議の出発点として、モンテスキューの見解を中心に、権力分立制とそれに関連づけて論じられている自由（の権利）についての見解を述べる。
- (2) ついで現代的諸問題を考える前提として、「国際人権規約」を参考にしながら、現代的権利の考え方をみる。
- (3) ケルゼンの見解を参考にしながら、今日的視野に立って権力分立制の意義（と限界）およびわが国におけるそれらをめぐる諸問題について考える。

⑥ 芸術と科学の融合（ガウディの建築論）

松 倉 保 夫（九州芸術工科大学）

自然科学と芸術とは一般には無関係なものとして取扱われているが、我々が住んでいる自然界には全て科学的な面と芸術的な面の両面が存在する。

我々が良い建築（都市）を望むとき、機能的にも芸術的（精神的にも）秀れたものを求めるが、その時芸術性と科学性とは相容れるものか或は相反するものであるかの問題をここで考えてみたい。これを図でかけば、次の色々な場合が一般に考えられる。



ここで、近代スペインの建築家アントニオ・ガウディ（1852—1926）は芸術の必要条件として科学があり、それらの総合が設計であると主張した。ここでは彼の主張をスライドを用いて具体的に説明する。

⑦ ドイツの「都会詩」について

杉 谷 恭 一（熊本大学）

19世紀末、ドイツでは、プロイセンを中心に、急速に工業化が進み、それとともに、都市人口が急増し、大都市が形成された。こうした社会条件の変化に伴い、文学の分野でも、都会が、主に自然主義の文学者たちによって創作のモチーフとして捉えられるようになった。こうして芽生えたドイツの「都会詩」は、1910～20年の表現主義、20年代の新月主義等を経て、第二次大戦中の断絶にもかかわらず、現代まで、その命脈を保って来ている。

本講義では、自然主義から、現代に至る、ドイツの「都会詩」の系譜を辿りつつ、そこに表現された都市像（とくにベルリン）の変遷に光を当てる予定である。また、こうした「都会詩」を歌詞とする「ドイツ・シャンソン」を若干紹介し鑑賞する予定である。

⑧ 豊後土工と出稼ぎ病

— 地方経済・社会・教育・健康の地域問題 —

船橋 泰彦 (大分大学)

大分県南部には豊後土工と呼ばれる人びとの出稼ぎが多い。彼等は出稼ぎを専業とし、トンネル掘りに優れた坑夫集団として特異な存在である。5年程前から、彼等の間にじん肺と振動病の患者が非常に多いとアピールされるようになった。

出稼ぎ専業は健全な就業形態と必ずしも云えないが、じん肺・振動病などの出稼ぎ病は許されざる過酷な労働条件から発生した。

問題の解決には、既に被災した人びとの治療・機能回復・救済ばかりでなく、出稼ぎ病の予防も含まねばならない。同時に、単なる医療問題としてではなく、なぜ出稼ぎ専業が形成されたか、過酷な労働条件で働かざるを得ないか、救済と予防が必要と認められているにもかかわらずなぜ不十分か…という、社会・経済構造の認識にたつて、地域社会の総合対策として考えねばならない。

⑨ 豊かな社会の幻影

— エネルギー危機と社会福祉 —

森田 三郎 (長崎大学)

19世紀の欧米の社会学者たちによって描かれた社会進化図式は、今世紀にはいり、実証的学問としての文化人類学の発展などにより、そのままでは受け入れられないという結論がでている。しかし社会進化それ自体が否定された訳ではない。新しい社会進化論者である *Leslie A White* は、進化の指標として、1人あたりのエネルギー使用量を使うように提案している。そのような観点から再構成した人類社会史の中で、いまの日本を含む西欧的近代社会のエネルギー源として、化石燃料がはたした役割は、計り知れない。そうした基盤の上になつた現代文明社会に、石油資源の枯渇など、危機的事態の到来を予測、警告したのがローマ・クラブであり、それが一部実現したかと思わせたのが石油ショックであった。このエネルギー危機が、人類史上どのように位置づけられ、現代社会にとってどんな意味があるのか、を考えてみるのが、講義、討論を通じての目標である。

⑩ 九州・沖縄の水資源

— とくに地下水資源について —

古川 博 恭 (琉球大学)

水資源のなかで重要なものの一つに地下水資源がある。地下水は、その入れ物である地層の地質層序、地質構造に規制されて賦存しており、地下水盆とよばれる地下水を大量に含む地域を形成する。九州、沖縄地方においても水理地質学的に海岸平野や火山岩台地を中心とした中・北部九州、火砕流台地を中心とした南部九州、隆起サンゴ礁である琉球石灰岩台地を中心とした琉球列島の大きく3つの地域に区分することができる。この地域毎の水理地質学的特徴と地下水資源開発上の問題点について明らかにし、地下水利用上の問題についても言及する。さらに、地下水公害の一つである地下水塩水化や新しい水資源開発の方法である「地下ダム」について実例をあげて説明し、これらの現象や事業が第四紀地質と密接に関連していることを指摘する。

⑪ 放射性廃棄物の海洋投棄

杉浦 吉 雄 (鹿児島大学)

原子力の平和利用は現在、およそ二系統に大別される。一つは原子力発電、もう一つは放射性同位体の各方面への応用である。いずれにしても、これらは放射性廃棄物の処理、処分の問題を抜きにしては論ぜられない。核燃料再処理残滓のような高レベル廃棄物やPuなどの α 廃棄物、炉心構造物のような大型廃棄物や廃炉のような放射能施設の処理、処分問題など今後の課題であるが、ここでは、比較的その対策が整備されつつある低レベル廃棄物の処理、処分問題を概観してみたい。

この問題は、科学面と法制面の二つをもっている。従って、両面から眺める必要がある。はじめに法制面からみてゆきたい。わが国は昭和51年(1976)10月原子力委員会決定による低レベル廃棄物対策の基本方針がある。これによれば、わが国は陸地処分と海洋処分を併用する。海洋処分は固化体化を行い深海底に沈める。処分に当っては、事前安全評価を十分に行い、その結果を踏まえて試験的処分を行い、その結果の評価を経て安全性を確かめた上で本格的処分を行う。一方、有害物質の海洋投棄は、現在、国際的な規制の方向で法制化が進められており、この線に沿って、わが国は、ロンドン条約と略称される「廃棄物およびその他の物質の投棄による海洋汚染の防止に関する条約」と国際原子力機関 (IAEA) の高レベル放射性廃棄物の定義と勧告の枠の中で、多国間協議監視機構に加盟した上で、海洋投棄を実施するように諸準備が進められている。IAEAの定義と勧告および前記の

事前安全評価は、海洋学的、放射線影響学的根拠に基くもので、その内容についてやや詳しく解説したい。

⑫ 科学の効用

後 藤 賢 一 (九州大学)

科学とは、人間が自然や社会を望ましい状態に変えようとするときに、効果的な手段や方法の知識を得るため、人間の理性の力によって認識された自然や社会についての法則や、そのための作業であると考えてみる。

この科学は加速度をもって発展し、いまや偉大な力をもつにいたった。その結果、一方では期待されざる「負の効果」が目立ちはじめ、「地球の有限性」の問題も現実化し、さらに利用の仕方そのものの選択を迷わせる「難問」がつぎつぎに登場している。

こうして、「望ましい自然や社会の状態とは何か」「それらへの全人類的な合意にいたる智慧は如何にして獲得できるか」ということが問題になってきた。これらはもともと科学の問題とは異質であるが、過去における科学の発展過程で培われた問題追求の考え方や方法が応用可能であれば、これまた偉大な「科学の効用」である。



3. 学生たちの感想（手紙の形式による）

〔九工大・工・男子・19歳〕

A君。僕は九州地区国立大学間共同授業を終ろうとしています。九重は美しい所です。なだらかな山肌は緑のびろろのようだし、谷川は澄んでいます。硫黄の煙がたち上っています。この自然の中で五日間、他大学の人たちと講義を受け、討論をし、飲んで騒ぎました。きのうのレセプションでは、九州工大の「巻頭言」をやって喜ばれました。難しい授業に苦しんだこともわすれ、遅くまで輪になって歌ったりしました。まだいども話を交していない人があるのは少し残念です。そういえば女の子に話しかけるチャンスがあまりなかったなあ。まあいい。とにかくみんな同じように苦しみ悩んで生きていること、そして一生懸命生き方を見つけようとしていることが感じとらたのだから。これからの生活に、ここで考えたことを生かしたいと思っているよ。社会にはいろんな問題があるが、それを解決してゆくのは僕らだ。これこそ生き甲斐じゃないか。僕は今すごく高揚した気持ちだ。

それでは、帰ってゆっくり話すよ。

〔福教大・教育・男・24歳〕

前略、お元気ですか。

私は、今日まで4泊5日の九州地区国立大学間共同授業を受けました。

楽しかったことは講義よりも、仲間との話や食事、ゲームU.S.Wの方でした。私達は授業に対しても、もっと若者らしい態度が必要だと思うのです。しかし、私達の問題意識や知識の不十分さのため、興味を失ったり、あるいは先生の話をするのみにしてしまうのです。私は、自分の理論を推したてて争いたかったのですが、なにせあちらはその道のベテランですからかなうはずありません。すぐ反論されてしまうのです。

私は、だからもっと本を読んで知識をふやし先生たちと互角に討論ができるようになりたいと思います。またそのような知識があると、講義にももっと興味がわくかもしれません。

やっぱり私は未熟だな、というのが、今の私の実感です。でもいろいろな人と知りあえて自分に幅ができたような気がします。成長したのでしょうか。

ではまた。さようなら。

〔芸工大・工・男子・19歳〕

4泊5日の合宿は僕にとって大変有意義であった。雨で九重の登山はできなかったものの、各大学の先生の講義を聞き、また話し合うことができよかったですと思っている。日程が少しハードではあったが、最後の日の、講義内容に対する先生たちの相互の批評や討論などは、朝日分校でしか味わえない

企画で満喫した。また九州芸工大生は「芸人」の集りで賞讃され「芸大」とよばれさえた。

しかし、僕らにとっていちばんよろこばしかったのは、他大学の学生との交流であろう。日ごろ自分の大学、それどころかややもすると自分の学科やサークル内でしか交流のない私たちにとって、これは、またとないチャンスであった。夜を徹して飲み、さわぎ、語り合えた、とても充実した日々だった。九重にくるまでは他人同志であった一人一人が、いつの間にかうちとけた間柄になり、別れをおしむまでになった。

時が過ぎてこの合宿のことをふと思いだす時、みんなの顔をおぼえているだろうか。いや、おぼえているにちがいないと思う。こんなにすばらしいやつらなんだもの！

またいつかみんなで飲み、語りたい。

〔九大・工・男・18才〕

私が合宿共同授業の掲示を見たのは、学生生活にも慣れ、大学のまとまりのなさにあきれている頃でした。このような授業を通じ、多くの仲間たちと自分の考えなどを話し合っていたいと思いました。正直に言って、大学は個人個人が自由に行動し、他人の事などを考えずに孤独に生きている所だと思っていました。だからこの授業に来て、最初は自分の性格から、あまり他人に溶け込めませんでした。しかし、1日、2日とたつうちに、いろいろな機会に多くの人の意見などを聞いてみると、自分の学生生活に対する考え方が、まちがっていたことがわかりました。特に夜、2年生の人たちの考え等を聞いてみて、自分についても社会についても将来の目標を定めて、それに向かって生きていることを痛感し、今まで、ただの惰性から講義に出ていたことを恥ずかしく感じました。最後の夜のコンパは、異常なほど盛り上がり、今までこれほど燃えたことはありません。一見無気力そうな現在の学生にも、このような面があるということを知りました。若者は何事にも情熱的にのぞむべきだということが、この授業における私の最も大きな収穫でした。この授業は、確かに、私の今後の大学生活を変えたいと思います。また機会があったら、後輩にこの授業への参加を勧めたいと思っています。

〔九大・農・女子・19歳〕

4泊5日の共同授業、一言で言うと「きつかった」です。

自分の視野を広げようと、この講義を受けに来たのですが、やはり一教官あたりの持ち時間が少ないせいか、あまりつっ込んだ話は聞けなかったのが残念でした。まあ、4日、5日で急に視野が広がるとは思ってなかったけれど。自由討議の時間、「80年代の政治動向」という講義について討議したのですが、私が予想していた以上に、同年代の人たちが、政治について、国際関係や軍事力保持などについて、しっかりした態度で論じ合う事ができるのに驚きました。

私も、事前に社会関係の本や新聞に努めて目を通して、講義を受けたつもりだったのが、いざとなつて、自分の意見が全くない故に、はっきりした主張ができなかったのがとても残念だったし、情けなかった。社会現象をマスコミが論じているのをそのままのみにするだけでは、役に立ちません。自分なりに『消化』しないと意味のない事が良くわかりました。

この合宿には九州各地の大学から多くの学生が集まっています。部屋割りも、なるべく多くの他の大学の友人と接する事ができるように、組まれていました。

本当は、私ももっと多くの事を語り合いたかったのですが、消極的な性格の故か自分から進んで語りかけてゆくことができませんでした。最終日には、女子もほとんどの人が、徹夜で「ファイバー」していましたが、どうしても私は1人だけバカになり切れなかった。それがとつても心残りです。「バカになる事」も必要なですね。少しはお酒が飲める様にならないと……。

〔長崎大・教育・女子・20歳〕

7月11日～15日までの共同授業が今終わろうとしています。あと1時間少しで私はここ九重を発ちます。あつという間の5日間でした。

講義はなかなかのハードスケジュールで1日に2コマの日もあれば5コマの日もあって、もう少し平均化してもらいたかったです。一応全授業に出席はしたものの、数学などトンチンカンで、これですますます数学の勉強へのあきらめがついたぐらいいだし、私の知らない単語がいくつも出て来て面喰らいました。

わが長大は合宿授業が単位になりません（もちろんそれを承知でやって来たのですが、他の大学がもらえるのを知ると、少し差別を感じました）。この5日間ほとんど雨ばかりでしたが、先生方と身近かに話しができたし、各大学の人も友達になれてやっぱり参加してよかったと思います。講義は正直に言って理解できなかったものも少なくありませんが、自分自身に対して何がわからなかったかという問題提起になったことだけで、十分に目的を達したと思っています。最後の夜の自由討議の時間における各大学のかくし芸の披露は圧巻でした。

〔大分大・経・男子・19歳〕

久住は涼しいです。昨夜まで降っていた雨も上がり、今は晴れています。青空に山の緑がまぶしい。現在11:38AMです。雨、雨で、外はとつても静かな雰囲気でした。しかし、登山が中止となり残念でした。

毎夜のフリーディスカッションで、かなりの学生はバテ気味ですが、そこは若さでカバーしております。つくづく若さの特権というものを感ずます。各大学はいろいろな面で違っていますが、同じ九

州内の学生です。なごやかに五日間が過ぎました。

さて講義ですが（眠っている人もちらほらいましたが）かなり内容のある90分の講義であったと思います。しかも、大学では味わえない自由討議の時間をもつことができ、自分のふがいなさも感じました。ただ、講義の時間外では決められた交流の場以外での教官とのふれ合いができなかったのが残念でした。ふれ合いがなかったというよりもふれ合うことに気づかなかったといった方が正確でしょうが、あまりに過度に同世代同志のふれ合いに固執していたような気がします。教官は、人生の先輩です。教官は私たちの倍以上を生きてきています。ものごころがついた年を10歳とするならば、おそらく3～5倍の人生を歩んでこられた人生の先輩です。講義を聞くよりも人生論を語る相手とすべき人たちだったと今にして思います。講義は聞かずとも、人生論だけは……という思いを、これからの学生生活で実現したいものです。

〔佐大・教育・男子・20歳〕

ほんとうに楽しく講義を受け、有意義な生活が送れたのも、やっぱり食事の用意や料理をつくってくれたおばさんたちのおかげだと思い、心から感謝しています。

普通の大学の講義と比べてずっとわかりやすく、また自分の視野も広がりました。

九重と一緒に生活したみんなを全部友達にすることができ、非常に愉快ですばらしい日々だと思っています。

みんなやる気満々で、最初からあまりとばしすぎ、夜は少し酒を飲んだりしました。しかし、私はこの酒の場で多く友人を得ることができたと思います。あまり多くは飲んでいませんが、みんなと歌や意見を率直に交換できたこと、何人かの人と徹夜して、同和教育や九州の各大学での生活のこと、勉強のこと、自分の将来のことなどについて語り合えたことは、非常に意義があったと思います。

最後に、来年参加する人たちに、言いたいことがあります。それは、大学生である限り 6,000円をおしらず、九重研修にはふるって参加すべきだと言うことです。

各大学の講師の先生方、これからもはりきってガンバッテください。

さようなら。

〔熊本大・文・女子・18歳〕

みんな、それぞれ違った環境に育ち、みんなそれぞれ違った言葉を話し、みんなそれぞれ違った夢を追いかけている……

そんな、あなた達と語り会えて、すっごく勉強になりました。自分の狭さ、ちっぽけさをひしひしと感じさせられて……

はじめは、あまり気のりしなかったんだけど、この合宿に来て本当によかった！

このままみんなと別れてしまうのはとてもつらいけど、またきっと、いつかめぐり逢う日が来ると信じます。

そして、その日までに充分自分をみがいて少しでも大きな人間になっていたい。心からそう思います。とにかくみなさん、すばらしい思い出をありがとう。

〔宮崎大・教育・女子・18歳〕

昨夜は、とうとう徹夜になってしまいましたね。でも私のために熱心に意見や感想をいってくださったことは一生忘れません。結婚と仕事、育児問題、核家族問題そして愛情について、いろいろ考えさせられました。

あなたが「希望をもっともっと柔軟な姿勢で生きるべきだ」と言って下さったことで、心の奥にあった一種のいじな硬い考え方がとれたようです。広い心をもてたというか、男性に対する考え方が変わりました。愛というものの深さや尊さ、強さ、信頼について自分の認識のあまさを知りました。生きるということは、決して生やさしいことではないけれど、しかし、悲観的なものでもないんだと考えられるようになったのです。私の悩みのひとつひとつを、自分の問題としてとらえて率直な意見を下さりありがとうございました。見ず識らずの私のために、心を割って、何もかもぶちまけて下さったことに本当に感謝します。

さようなら お元気で。

〔鹿大・法文・男子・21歳〕

九重研修は本日幕を閉じます。

来年君も行ける機会に恵まれるようにと思いながら、参考にでもなればとペンを取ります。

君が常々言っていた「求めるものは大学にあるのか？」という問いに何らかの解答の緒（いとぐち）を与えてくれるのがこの5日間の成果だと言ってもよいように思います。

大学にも、やはり友情や語り、熱意、真剣さなどが、すべて存在しているのです。ここにくると、君が疑い、まだ目にしたことのない大学の像が、我々の前にその姿を表わしてくれるからです。

私の筆で、この5日間を語り尽くす事など出来そうもありません。

とにかく、君の眼で、肌で、頭で我々と同じ経験や感動をぜひジカに味わってください。ではまた。

〔琉大・法文・女子・22歳〕

沖縄という異なった歴史と風土の中で育った私は、自分が九州の人たちとどれだけ交流できるのか

と不安でしたが、こうした気持ちは、たちまちにして打ちやぶられた気がします。（中略）

琉大も半数以上が県外の人ですが、このような現状を見ると、私たちはいつまでも沖縄のなかに孤立してはおられませんし、視野を広げなければなりません。垣花教授の講義に各地からの大学生が耳を傾けてくださったことに、沖縄の人間として嬉しく思いました。「沖縄」が契機となり、人間が大学生が、男が、女が、そして私が、一体なんであるのかを再認識させられたという点で、有意義な5日間でした。ありがとうございました。



4. 第5回合宿共同授業の経験から

(1) 反省と展望

九重分校オーガナイザー 安 東 毅 (九州大学)

共同授業最終日の昼ごろ、各大学の迎いのバスが九重研修所前に来る。先発する車の中の学生とそれを見送る学生が、各所で窓ごしにかたい握手を交している。車の中では、一人の女子学生が、涙ぐんで別れを惜んでいる。例年のこのような情景を見ながら、これで今年も各大学間の学生の交流を深めることができた、という満足感に、私は浸ることができた。さらにこのような学生達の姿に、「シラケ世代」といわれる彼等にも私達の若かりし頃と同じ多感な青春の血が流れていることを見出し、なぜかしら私も安堵感を覚えたのであった。

ところで肝腎の授業のことだが、今年は「現代社会の諸問題」というメイン・テーマのもとに行われた。このテーマは、今回から設置された企画委員会の議を経て決められたものである。

私としては、この一見漠然としたメイン・テーマの焦点を、中近東をめぐる世界政治の動向や、最近社会問題となりつつある新しい価値観の担い手としての青年とそれに関係する教育の問題、さらには文学、芸術上の新しい動向などに置くつもりでいた。しかし、現実の講義では、教師の選定問題などもあって、例年と同じように多少焦点の定まらぬ内容になってしまった。しかし意欲的な先生方による熱心な講義は、それぞれの分野における現代の問題を学生たちに十分に明示して下さったと私は確信している。後は、学生が各自で、それを、どう総合し体系化するかということだけであろう。

ただ私は、今年の時割で一つの試みをしてみたことを述べておきたい。全体としては系統性に欠けるスケジュールのなかに、コア（中核）となるべきサブのテーマをそう入してみたことがそれである。つまり、九重分校の7月14日の4コマの講義であるが、これらは先進工業国の一つたる日本での開発をめぐる諸問題をとりあげている点で共通性をもつテーマである。今年のこれは、事前に準備したものでなく、私が独断で編成したものであるため、学生に与えたその効果についてはまだ明らかでない。しかし、講義担当の教官を各大学独自で選定する現在の運営方式では、全体的なメイン・テーマは今後も幅広く漠然としたものにならざるをえないであろう。そこで、これを補う意味で、事前に準備されたサブのコア・テーマを一つぐらい設定しておくという方向を検討してみてもどうか。

そのほか、今年共同授業のなかで気付いたことの一つに、開催時期の問題がある。これまで5回の合宿共同授業では、必ず半日を登山に当てている。（第1回目に関りソフトボール試合にした。）

そして、教師と学生が一緒になって九重の自然を味わいつつ山登りすることは、共同授業の重要な目標の一つであろう。しかし、7月10日前後は、これまでの経験からしても、また気象上の常識としても梅雨末期に当たっており、まだ安定した好天を期待することはむづかしい。オーガナイザーとしては、山に不馴れな学生が大部分という100人近い集団の登山は、天候の安定なしにはなかなか決行しにくいものである。その点で開催時期を抜本的に再検討してみてもどうかと考えている。

もう一つの問題は、参加学生数が1名ないし2名という大学の問題である。合宿共同業4泊5日間の団体生活の運営は、各大学単位で構成された学生の班の自主的行動に基づくことを原則としている。

したがって、1～2名の参加では、大学単位での班編成が実質上不可能である。参加大学の側としては、所定の数の参加学生を何とか確保していただきたいものである。

さて、この九州地区国立大学間合宿共同授業も、今年ではや5回を数えるに至った。この間参加大学数も、はじめの6大学から今年の12大学へと倍増しており、参加学生数は今年の2分校制採用以来これまた2倍に膨張している。一般にこのような事業は、5年の歴史をもつと、いちおうの軌道になるものだといわれる。その反面、この時点で過去をふり返り反省と総括を行うことが、その事業の今後発展のためには必要不可欠なことといわれている。その意味で、共同授業参加各大学でそれぞれこれまでの合宿共同授業の経験を、一度総括してみても、私は考えている。そのまとめを、できれば今秋の企画会議までに出して頂きたいものだ。

最後に、もともとオーガナイザーとしては不向きな私がなんとかその任を全うできたのは、各大学の関係教官や事務官のご協力によるものと考えている。ここに、関係各位のご協力に心から感謝の意を表するものである。

朝日分校オーガナイザー

首 藤 基 澄 (熊本大学)

4月にオーガナイザー役を鈴木明朗先生から引きつぎ、まだ先のことと考えているうちに、いつの間にか終わってしまったという感じが今は強い。メインテーマ「現代社会の諸問題」や授業担当はすでに内定していたので、いかに滞りなく実施するかが、私に課せられた課題であった。不慣れなために、その成果はおぼつかないが、主管校の九州大学を始め、多くの方々のご指導やご協力を得、ともかく無事に終了できたことをありがたく思う。

最初の高沢先生の講義から、時間を一杯に使って行なわれ、現代社会の多様な問題が浮き彫りにさ

れたが、過密な時間割のために、学生にはやゝ不消化の部分があったかもしれない。しかし、3日、4日と進むにつれて、ついに内部に蓄積し、触発されたものを表現したい欲求にかられ、予定外のシンポジウムを設定するまでに盛り上がったことは、特筆に価しよう。後藤先生の最終講義は、すべての講義を熱心に聴講し、多くの問題をとりこむ形で行なわれたが、それがシンポジウムの手がかりを与えてくれた。森本先生の司会で、十名の教官と七五名の学生が臆せず議論し、何かを捉えようとした体験は尊い。惜しいことに時間がまたたく間に経過し、まだ言い足りない思いを抱いて帰路につかねばならなかったが。

合宿期間中は、連日雨にたたられた（皮肉にも最終日は天気になったが）。できることなら登山をさせたいという考えから、時間割を次から次に変更し、日程表は大幅に組み換えられてしまった。そうしてようやく諏峨守（すがもり）越えまでの登山ができたが、あの暗い山小屋で、古川先生の火山の話聞いたのは幸いであった。よく通る声が、小さな現実に躊躇しているわれわれを、何万年も前の世界に連れもどしてくれたのである。

朝日高原福祉センターには種々迷惑をかけることになったが、それにつけても場所や期日については今後一層の検討が必要のように思われる。大学間の壁を取りはらって共に学び、交流を深めるという企画に参加して、学生ばかりでなく教官たちも「それなりに」一つの体験をすることとなった。体験は担う人の姿勢によって増減する。それぞれに生の足しになるような体験であってくれることを、切に願うものである。

(2) 感 想

小 林 俊 雄（九州工業大学）

合宿共同授業の日程表を見て、これはハード・スケジュールだとまず感じた。そして、目的地までの車中における学生の参加動機や過し方についての発言を聞くにつれ、本授業の目的達成についてはいささかの懸念すら覚えていたのである。しかし、予想に反して学生の出席率はよく、二・三の例外はあるにしても、受講態度もきわめてよかった。また、自由討論にしても発言が多く、活発であったように思う。

「現代社会の諸問題」と言うメインテーマは広範囲であるが、身近な問題も少なくなく、特別の準備はいらず、社会問題については新聞・雑誌による知識で充分理解できる内容であった。しかし、一部の授業では問題提起もあり、聞きっぱなしでは済まされない思いにさせられた。受講テーマの中

から関連する書物を読み、自ら補足をし、問題を改めて考えなおして見るのは、学生たち自身の課題であろう。その意味で、単位の認定の有無に関係なく、レポート提出の必要性和意義を痛感している。

学生相互や大学間の交流についてはその目的を十分に達していると思う。ほとんどの学生が「合宿共同授業に参加して良かった」と発言しているが、これを「感覚的にではなく、何故良かったのかを考えて欲しい」と言う教官の発言があり、私も全く同感である。

折角の大自然の中で行われたこの授業が、期間中悪天候にたたられたことは心残りである。最後に地熱発電所見学の際サンダル履きの学生が散見されたが、工場では災害防止に大変気をつけているので、ちょっと気になった。

山下俊介(長崎大学)

合宿共同授業の日程の大半は雨にたたられた。予定されていた久住登山はついに果せず残念がる声も聞かれたが、それはそれでよかったのではないかとも思う。共同授業の本来の目的が「学生と教官が一堂に集まり、寝食をともにしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深める」(「共同授業実施要項」より) ことにあるのだから。それで余った時間を、われわれはどう使ったか。第三日目ともなれば自発的にいくつかのグループをつくり、教官と学生の間、あるいは各大学間の隔てもなくさまざまな問題を語りえたではないか。(もともとこれは、体を動かすことが嫌い、酒類であればなんでもOKという小生のきわめて独断的な感想である。)

正直なところ、今回の共同授業への参加を依頼されたとき小生の心は重かった。「重かった」のは次の理由による。共同授業は二重の面をもつ。第一は先に引用した「交流を深め」ようという目的。

第二に「授業」であるかぎり単位認定はあってもよいこと。小生の属する教授会でとくに第二の点について激論がたたかわされた。小生の立場は第一の点については積極的に賛成。できることなら、さらに進んで各大学間の学生たちが協議会を作り統一テーマを設定して討論する合宿研修(授業にあらず)を組織するくらいになってほしいほどだ。そのさいチューターとして教官を招くのもよい。しかし第二の点については、小生はきわめて消極的、むしろ反対を唱えたいくらいだ。(容易に単位をえられる授業へと学生たちがラッシュするのは、近年各大学でますますふえている奇現象である。)小生の属する教授会では、今年は時期早尚として単位認定はとりやめた。評価を伴う単位ではなく、評価を伴わない参加認定書的な単位認定は考えられないものだろうか(以上の意見はあくまで小生の個人的意見であり、小生の属する教授会の意見とは無関係である)。

長崎大学の参加学生は、九重分校へ6名(内1名は直前になってとりやめ)朝日分校へ1名ときわめて少なかった。少なかったのは、わが教授会が単位認定を認めなかったことによるとは信じたくな

い。同時期にいくつかの興味ある集中講義が開講され、また各クラブの合宿等による猛練習が開始される時期でもある。共同授業へは少なかった参加学生たちが、帰途のバスの会話の中から、彼らがさまざまに有意義な成果をえてきたことが窺えたのは嬉しいことであった。ただ合宿所ででの別れぎわに知己となった他大学の一学生が「先生、僕たちはこれから帰って20枚のレポートを書かんばですよ」と言ったのも耳に残る。

最後に今回の合宿共同授業成功のうらには主催を担当された大学、ならびに参加された教職員の皆さん、会場となった施設の職員の皆さんのきわめて好意的なご協力があったことを思い、深く感謝している。

(1980. 7. 16)

垣花豊順 (琉球大学)

第5回合宿共同授業に、学生24名と共に参加させていただきました。

合宿共同授業は、本来学生のためになされるものですが、参加してみると専門分野を異にする諸先生方の講義をまとまった形で聴くことができ、そのうえ寝食を共にして現代社会が直面する諸問題について討議する機会が与えられました。そういう意味から、この共同授業の試みは、教官にとっても大変有意義な企画であることを痛感させられました。各教官の講義は個々バラバラになされ、中には「こんな発想もあるのか」と驚嘆させるのもありましたが、終ってみると現代社会における問題の所在と、その解決の糸口を示唆しているようで、大変参考になりました。たとえば、水・エネルギー・開発・環境などに関して指摘された問題点は、これまでの「より安くより多くの物を供給すること」が豊かな生活の必須要件であるとの考え方から、「自然の摂理を重んじ、資源には限りがあることを謙虚に受けとめた節度ある供給」が、豊かな生活のためにも必要であることを示しています。専門分野を異にする教官が寝食を共にして現代社会の直面する諸問題について講義し、討議する場は他では得られないし、今後も合宿共同授業を継続して、たとえば「平和維持のあり方」「教育のあり方」「高齢者社会のあり方」などのテーマのもとに、講義や討議が展開されるならば、一層有意義なものになるだろうと思っています。

学生諸君は、多くのことを学び、友情を深めたことと思います。琉球大学からの参加者は、遠距離のため各地（特に鹿児島大学）で温かい友情に迎えられ、刺激や得るところも特に多かったと思います。友情の絆が卒業後も結ばれるように合宿共同授業同窓会のような組織を結成し、職場・社会・地

域における友情と連帯を深めるようにすることはできないのでしょうか。

最後に企画・運営で多大のご苦勞をなされた九州大学と熊本大学の教官・事務官の方々に、厚くお礼申し上げます。

中 川 義 朗 （宮崎大学）

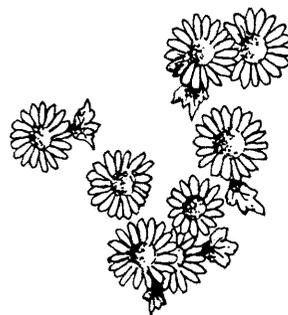
最初この合宿授業計画表を手にしたときは、正直にいつてずいぶんハードスケジュールだなあ、という感じがしたものだが、実際に参加してみるとそれ程でもなく、楽しい四泊五日であった。所期の目的からしても大成功だったように思う。

大学を越えた学生間の交流・友情・連帯、教官と学生との「ホンネ」を出し合った対話など、合宿授業ならではの成果であろう。ただ五日間坐りばなし（九重分校は昼の間に講義）で聴講するのは、学生諸君にとって少々きつかったのではなかろうか。

また、一般教育における「総合科目」として充実させてゆくためには改善すべき点も少なくない。例えば、1日ぐらい延長して一講義について20～30分程度質疑応答時間を設定し、講義をさらに充実させること、少くとも1回以上は講義担当教官の打合わせ会議をもうけ、全体テーマの趣旨や講義内容、その程度などを事前に協議して授業内容の「総合性」をいっそう深めること等が、まず検討されてしかるべきであろう。それから担当教官のうち、少くとも各大学一名は来年度も引き続き講義担当（もしくは引卒）として参加することが必要であろう。

各大学の事情や予算など困難な問題もあろうが、それぞれ意見を出し合ってさらに有意義な企画にしていきたいと念じている。

主管校ならびに主催校の先生方、ならびに事務職員の皆さん、本当に御苦勞さまでした。



5. 参加者名簿

(1) 九重分校

① 教職員

九州大学

教養部長 河野和正
教授 安藤延男
" 安東毅
" 野口健司
" 徳本正彦
事務長 鶴田卓夫
補佐 足利晋
教務掛長 有田照彦
事務官

福岡教育大学

教授 笠栄治

九州工業大学

助教授 塩出彰
" 小林俊雄

佐賀大学

助教授 田中達治

長崎大学

助教授 山下俊介
事務官 坂口豊

熊本大学

助教授 井上厚雄
" 今江正和

大分大学

教授 富永明

宮崎大学

助教授 中川義朗

鹿児島大学

助教授 飯田泰雄
事務官 朝照雄

琉球大学

教授 垣花豊順

② 学生 (*印は女性)

九州大学 23人

1 桜井 祥行 (経済 2)
2 池田 悟 (農 2)
3 射場 厚 (理 2)
4 大楠 秀樹 (農 1)
5 岡 昌弘 (農 2)
6 川島 明宏 (工 2)

7 畦原 俊介 (工 2)
8 西川 和男 (工 2)
9 佐々木 貴幸 (工 2)
10 鈴木 徹 (工 1)
11 田中 晴治 (文 1)
12 中野 武登 (理 1)
13 永松 治彦 (経済 2)
14 野口 美津夫 (理 2)

- 15 畠山 貴次 (工 2)
- 16 早木 勉 (工 1)
- 17 牧野 一郎 (医 2)
- 18 堀 靖人 (農 2)
- 19 村川 雅章 (法 1)
- 20 吉田 竹志 (農 2)
- 21 重松 幹子 (農 2)*
- 22 徳永 恭子 (工 2)*
- 23 山本 圭子 (農 2)*

福岡教育大学 1人

- 1 庄野 憲治 (教育2)

九州工業大学 1人

- 1 伊藤 元明 (工 1)

佐賀大学 9人

- 1 大羽 剛 (経済2)
- 2 田川 孝二 (教育2)
- 3 宮原 正行 (教育2)
- 4 小川 徳晃 (教育1)
- 5 本山 秀敏 (経済1)
- 6 浜崎 文寿 (理工2)
- 7 村田 和博 (理工1)
- 8 阿部 龍介 (理工1)
- 9 木村 要子 (理工1)*

長崎大学 5人

- 1 加藤 茂樹 (医 1)
- 2 川口 義数 (経済2)
- 3 入江 淳子 (教育1)*
- 4 小山 智佳子 (教育1)*
- 5 宮下 景子 (医 1)*

熊本大学 9名

- 1 沖見 正義 (理 1)
- 2 山下 桂造 (理 1)
- 3 田中 敬吉 (文 1)
- 4 南篠 俊一 (文 1)
- 5 宇野 和文 (法 1)
- 6 北田 和弘 (理 1)
- 7 丸田 由紀 (文 1)
- 8 寺本 由美 (法 1)
- 9 中田 好子 (文 1)

宮崎大学 1人

- 1 宮内 明子 (教育1)

大分大学 5人

- 1 清水 巖 (経済2)
- 2 河野 善辰 (経済2)
- 3 江頭 直行 (経済1)
- 4 大塚 由美子 (経済2)
- 5 分島 節子 (経済2)

鹿児島大学 8人

- 1 野口 英一 (法文2)
- 2 福丸 恭伸 (法文2)
- 3 井口 浩喜 (法文2)
- 4 渡辺 利彦 (教育1)
- 5 塚脇 真二 (理 2)
- 6 古賀 醇 (工 1)
- 7 牛島 孝 (医 1)
- 8 武田 伸司 (法文1)

琉球大学 12人

- 1 上原 修 (法文2)
- 2 上原 宏光 (法文2)

- 3 照屋 正 (法文2)
 4 森田 浩次 (法文2)
 5 田中 健次 (教育2)
 6 石原 昌弘 (法文1)
 7 漆畑 文彦 (教育3)

- 8 新垣 益枝 (法文3)*
 9 棚原 美智子 (法文2)*
 10 宮城 清美 (法文2)*
 11 安里 加代子 (教育2)*
 12 神里 みどり (保健2)*

(2) 朝日分校

① 教職員

九州大学

教授 後藤 賢一

九州芸術工科大学

教授 松倉 保夫

佐賀大学

助教授 高澤 淳夫

事務官 角 正秀

長崎大学

助教授 森田 三郎

熊本大学

教養部長 奥村 孝一

教授 首藤 基澄

助教授 谷口 紘八

〃 森本 哲夫

〃 今江 正知

講師 杉谷 恭一

〃 佐藤 武之

事務長 塩山 卯之助

事務長 朝岡 安

補佐 和久田 卓

教務係長 中村 敏幸

事務官 小原 博信

大分大学

助教授 船橋 泰彦

宮崎大学

講師 福海 成宏

宮崎医科大学

外人教師 ロバート・J・
 アダムス

鹿児島大学

教授 杉浦 吉雄

琉球大学

教授 古川 博恭

② 学 生

九州大学 16人

- 1 池田 耕一 (医 2)
- 2 青木 勤 (農 1)
- 3 飯牟禮 和彦 (農 2)
- 4 今田 高稔 (法 1)
- 5 音田 良博 (理 1)
- 6 重久 齐 (工 2)
- 7 竹下 一規 (工 2)
- 8 長広 知規 (法 1)
- 9 野田 保 (工 2)
- 10 則松 直樹 (工 2)
- 11 速水 利泰 (工 2)
- 12 藤田 徹 (工 2)
- 13 藤田 靖英 (経 2)
- 14 古川 博文 (工 2)
- 15 牧角 仙一郎 (教育 2)
- 16 虞永 誠 (歯 2)

九州芸術工科大学 5人

- 1 戸田 輝信 (芸工 1)
- 2 山野 雅生 (芸工 1)
- 3 市村 元 (芸工 1)
- 4 今村 聖治郎 (芸工 1)
- 5 山下 成人 (芸工 1)

宮崎医科大学

- 1 島内 正樹 (医 3)
- 2 松岡 泰夫 (医 3)
- 3 沢 節子 (医 3)*
- 4 有藤 淳子 (医 3)*

佐賀大学 10人

- 1 和泉 徹治 (農 2)

- 2 原 清一郎 (理工 2)
- 3 小山 藤夫 (理工 2)
- 4 宇佐美 俊哉 (理工 2)
- 5 恒川 幹司 (農 1)
- 6 須藤 乃式 (農 2)
- 7 佐藤 幹延 (農 2)
- 8 都合 俊彦 (農 2)
- 9 大野 稔 (農 1)
- 10 西尾 恵 (理工 1)*

長崎大学 1人

- 1 茨木 正明 (医 2)

熊本大学 13人

- 1 坂田 洋 (法 1)
- 2 吉田 尚弘 (医 1)
- 3 瀬川 了 (医 1)
- 4 高田 和紀 (理 1)
- 5 司徳 小四郎 (理 1)
- 6 鶴田 孝憲 (理 1)
- 7 上別府 隆男 (法 1)
- 8 永本 一弘 (法 1)
- 9 松原 明美 (文 1)*
- 10 福住 みどり (教育 1)*
- 11 堤 千賀子 (文 1)*
- 12 岩田 弘子 (教育 1)*
- 13 俵 正子 (教育 1)*

宮崎大学 2人

- 1 平田 哲也 (教育 4)
- 2 田島 和子 (教育 3)*

大分大学 4人

- 1 安田 幸則 (工 1)

- 2 大田黒 洋 (工 1)
 3 下谷 晴彦 (教育1)
 4 松尾 俊和 (工 1)

鹿児島大学 8人

- 1 秦 明天 (教育1)
 2 川内 康範 (教育2)
 3 谷口 晋平 (理 2)
 4 藤井 宏治 (理 2)
 6 三浦 正治 (理 2)
 6 原田 成美 (法文1)*
 7 池山 真由美 (法文2)*
 8 折口 佐和子 (教育2)*

琉球大学 12人

- 1 仲栄真 智 (法文2)
 2 宮城 能彦 (法文2)
 3 井上 園市 (教育2)
 4 大城 貞義 (工 2)
 5 儀間 朝浩 (法文1)
 6 寺本 幸司 (法文1)
 7 大城 きよみ (教育3)*
 8 町田 光子 (教育3)*
 9 平良 悦子 (教育3)*
 10 崎山 瑠美子 (保健2)*
 11 高嶺 綾子 (保健2)*
 12 大城 貴美子 (保健2)*

6. 付 録

(1) 昭和55年度合宿共同授業実施に至るまでの会合等メモ

年 月 日	事 項	内 容
54. 8. 9	打ち合わせ	(長大、高橋教養部長ほか1名 九大、河野部長ほか2名) 長崎大学から、共同授業について問題提起があった。
11.8-9	九州地区国立大学教養部長会議	○昭和55年度九州地区国立大学間合宿共同授業 (第5回) を54年度と同じく2分校で実施することを決めた。 ○長崎大学から、合宿共同授業のあり方その他について提案があった。
11. 26	オーガナイザーの選定	○教授会で九重分校 (仮称) のオーガナイザーを選定。

年 月 日	事 項	内 容
12. 6	打ち合わせ	(九大河野教養部長ほか3名) ○参加大学の関係教官による合宿共同授業企画会議の開催について。
12. 19	企画会議	○昭和55年度合宿共同授業の時期、場所、メインテーマなど。 (8大学 13名出席) ○合宿共同授業の組織・運営 〔 名 称 〕 〔 構 成 〕 九州地区国立大学間合宿共同授業委員会 …… (九州地区国立大学教養部長会議) ↓ 企 画 委 員 会 …… (参加大学) ↓ 実 施 委 員 会 …… (授業担当教官)
12. 26	授業担当教官の推せん 依頼ほか	○実施要項、日程表の原案 ○当番校 ○メインテーマ及びサブテーマ ○講師選定の方法 ○実施の時期及び場所 ○単位の認定 ○授業担当教官の推せん及び講義題目…… 1月31日締切 ○バス借上料等校費必要額…… 3月15日締切り
55. 2. 12	打ち合わせ	(熊大2名 九大5名) ○経費要求 ○授業担当教官の各分校への配置 ○参加学生数の両分校への割振り
3. 10	打ち合わせ	(九大2名 熊大5名) ○実施要項案 講師、講義題目、参加費 ○日程表案 ○実施委員会の開催時期 ○大学間相互交流教育経費
3. 18	経費要求書の提出	
5. 19	実施委員会	(11大学22名出席) ○実施要項の確認 ○日程表の確認 ○講義要旨 ○大学別共同授業経費 ○昭和56年度合宿共同授業の実施
6. 20	参加者氏名の確定	

(2) 実りの多い合宿授業とするために

後 藤 賢 一 (九州大学)

共同授業に参加することになった諸君は、いまどのような期待をこの授業に対して持っているのでしょうか。これまで2回この授業に関わった教官として、私は自信をもって「それはよかったね。大いに学び、遊んで来給え。」とすることができます。

暑い夏に涼しい高原で、各地の大学からの学生と教職員が、数日間寝食をともにして交流を深めるわけですから、その気になれば相当の成果が期待できることは間違いありません。しかし実際には、はじめの参加意識に問題があったために、授業の終わりごろになって、もう少し続けたいような気持ちになった人や、不満というほどではないにしても、満足ともいえない中途半端な気持ちで終わってしまった人などが見受けられました。そこで、より充実した共同授業になることを願って、私の経験をもとに、気付いたいくつかのことを諸君に伝えたいと思います。

まず「人間関係」についてです。誰でも、初めての場所で初めての人々に会い初めての行事に参加するとなると、一体これからどんなことになるんだろうと自然に警戒心が働き、緊張するものです。状況の展開に見当がついたうえで、自分の行動を決めようとするものです。皆そんな風にお互いに思うのです。まずこの心理的な壁を意識的に破りましょう。誰にでも積極的に自己紹介的なことからでもいいですから話しかけてください。そして少し慣れたら一步すすめて、ありのままの自分をさらけ出して、喜びや悩みを出し合ってください。とくに初めのうちは人を限定しないで、広く友人になるようにしましょう。異性とだけより多く話そうと気を使ったり、旅行に行つて泊めてもらえるかも、などといった下心を持ったり、鼻持ちならぬ自己PRに腐心するのは感心できません。また、この授業には10数名の教官や事務官が各大学から来ていますから、それらの人たちとも何事によらず気軽に話したらよいと思います。

そうした交流の中から、たとえ反対意見の人であっても、話の内容を深められるような人が見つかって、じっくり話し合うことができれば、もうそれだけでこの授業に参加した甲斐があったと言えるでしょう。

つぎに、「自然関係」についてですが、授業が行われる所は標高が約1100メートルで、九州の最高峰をなす九重連山に近く、スケジュールには久住登山も予定されています。急変する気象や特異な生物相、珍しい天然硫黄の鉱山や日本一の地熱発電所など、下界では接することのできない大自然のただ中で数日をおくるわけです。思う存分に自然を満喫しましょう。一昨年、生まれて初めて天の川と

流れ星を見たという学生がいたのには驚きましたが、「降って来そうな星空は毎夜私たちのものでした」との回想を寄せた学生の詩情を諸君も是非共有してほしいものです。一步戸外に出れば、そうしたすばらしい自然があるのに、ロビーの隅のマンガ本や週刊誌を漁ったり、テレビなどに時間を空費するのは惜しいことです。雨が降っても、傘をさしても、一人でも、あるいは誰かと連れ立ってでも、ひとときの散策を楽しむことの方を私はすすめます。

終わりに「社会関係」ですが、この授業のメインテーマである「現代社会の諸問題」について、諸君はすでに何か考えてみたでしょうか。おそらくまだ考えていないと思います。率直に言いますが、諸君はこれまであまりに受け身の教育に慣れすぎています。また残念なことに「単位になる」授業への魅力で参加を希望した人も相当いるはずです。まあ過去は過去、どうかこのメインテーマに関して何が学べそうか考えてみてください。「現代社会」についての自分の問題意識は何かを考えてください。みずから問題意識を持って講師の話を聴くのと、ただ受け身で聴くのとでは大変な違いがあります。テーマがあまり大きすぎて、「何が分からないか」が分からない、というところかも知れませんが、学生なりに、せめて何がどう分からないかを言えるくらいになれるよう積極的にテーマと取り組んでみましょう。

以上思いつくままを書いてみました。要するに人間・自然・社会のいずれの問題にせよ、それらについて諸君が主体的に考え行動できる人間に成長することが求められているのです。諸君はまぎれもなく形の上では大学生ですが、しかし諸君が実質的に、主体性をもった大学生になっているかと言えばそれは疑問です。

この授業は、諸君が本当の意味での大学生に脱皮する端緒として絶好の機会です。そのつもりで、どうか上手に羽目はずして、十分に満足な数日となるように、一つ体当りでやってみてください。

(物理学・教授)

付記：これは、今次合宿共同授業に参加した学生たちのために、事前または初日に配布されたものである。

あ と が き

▶第5回合宿共同授業の報告書の校正を終えてこれを眺めている。第4回までの報告書とくらべ、とりたてて新しい内容は見いだしがたいが、しかし参加学生のほとんどが新人であることと、彼らが新たな感動と学習を体験して各地に散じていったことだけは確かなことである。この実感こそが、合宿共同授業の企画者たちを支える主要な力であると言っても過言ではない。

▶第5回までの参加学生数は通算で596名に達したことになる。この人数は、全九州の大学生数に比べれば、まことに寥寥たるものと言わざるをえない。しかし、彼らの胸には「燃えさかる火」が点ぜられているはずである。その意味から、今年度中には何とかして、彼らの「その後の歩み」を捉えてみたいと考えている。昨年末おしつまつてのことだが、熊大や佐大からもやってきて、福岡市で第5回参加者有志のコンパが開かれ、参加教官にも招待があった。嬉しいことだと思っている。

▶本報告書にも垣花琉大教授が書いておられるように、この合宿共同授業が教官に与えるインパクトや意義は小さくないようである。こうした種類の、寝食をともしなされる大学間教官・職員交流は、他に類を見ないものではなかろうか。新しい交流プログラムを生みだす原動力になることも、あながち夢ではあるまい。

▶それにしても、この企画のスムーズな運営という観点からすれば、既設の、とくに国立大学の共同研修施設や設備は、少なからず不便であると言わざるをえない。よく使用される九重の研修所は、昼夜を分かたず湧き出る温泉は最高なのだが、専用の大講義室としては和室大広間を当てる以外にないという有様である。畳に坐ってのハードな日程は、まことに気の毒の一語につきる。150人位の専用の講義室と、それに体育館でも併設されればバンバンザイであるが……。

▶1980年の12月には、すでに第6回にむけての準備会が開かれた。次回は、雲仙（九州大学当番）と島原（長崎大学当番）で、7月に同時開催となる予定である。

第6回合宿共同授業の成功を期待したい。

〔編集者：安藤延男(九州大学)〕

発行年月日 昭和56年1月20日

発行者 九州大学教養部

〒810 福岡市中央区六本松4-2-1

電話 (092) 771-4161